平成 14 年度国立国語研究所上級研修　修了発表

初級後半期からの自己表現授業

倉本　文子（カイ日本語スクール）

1　はじめに

来日して日本語の勉強をはじめて数カ月経つと、学習者からさまざまな種類の不満や不安を聞くことが多くなる。日本語という新しい言語への興奮も冷めてきて語彙や文型など覚えなくてはいけないことが果てしなくあるように思えたり、思ったように表現できなくて悔しい思いをしたりすることがあって学習態度へその影響が表れることがある。また、異文化接触の点から考えても、「日本社会との違いという目新しさも不満の種になってくるこの時期は、学習者がストレスを感じる最も危機的な時期」（海保＆柏崎 2002）だと考えられている。このような学習を妨げる様々な要因が出てくるこの時期こそ、学習者が多くの時間を過ごす教室という環境を心の安定が約束される場につくることが必要なのではないだろうか。オックスフォード＆スカーセラ（1997）は学習者の抱える不安を軽減するためのいくつかの方法として「学習者を励まし勇気づける肯定的学習環境を作る」ことや「ペア学習、グループ学習、あるいは協同学習活動を行いクラスメートの中で言語を運用することへの負担を取り除き、学習者同士のインタラクションの機会を増やすこと」などを挙げている。今回の発表は教室という環境づくりを具体的な教材を使って行った実践報告である。

2　初級後半期とは

当校の場合、この時期は初級の後半期にあたりカリキュラムで言うと初級の最後の 3 ヶ月（学習暦 7 ヶ月目から 9 ヶ月目）である。ただ、作成した教材ははっきりとしたレベルを要求するものではないので、初級文型が終わったレベルのクラスでも使用可能である。したがって各テーマに沿って自分の考えや出来事を表現するための語彙や文型が通常の文法授業で揃い始めたころから使うことができるし、それ以上のレベルでは自分の表現をより適確に複雑に表現してみることが可能である。

3　自己表現とは

「心の安定が約束された肯定的な学習環境」を作る為にまず考えたことは相互理解ということである。お互いがどんな人間であるかという個々のつながりを持つことを目指した活動をすることで、相手を受け入れ自分も受け入れられるという空気を教室の中に作りたいと考えたのである。つまりテーマ（添付資料 1）に沿って自分の心に浮かんだことを、相手に理解してもらうことを目的として表現することをこの授業の中の自己表現とした。好きなことを好きなように話すようなおしゃべりにならないように、初級の学習者に表現しやすいテーマを選んで作成した教材を使用した。自己表現授業の中のコミュニケーションはお互いの違いや相違を知り合う機会として気楽な雰囲気の中で行われなくてはならない。従ってグループの活動は学習者によって

運営され、教師は各学習者の「言いたいこと」を言語化する援助役に徹する。

4　実践の説明

4—1　この授業の行われるコースの概要

対象となるクラスは表—1の準中級である。週カリキュラムだが、月曜日から金曜日まで50分1コマの授業が4コマあり、週20コマとなる。そのうち主に文型と語彙を中心に行う授業は10コマで、当校のオリジナルテキスト（構造シラバス）を使用する。この自己表現クラスは毎週金曜日の4コマ目に行い、1学期（3ヶ月）で8回行った。（表—2 参照）

上級	（特上級）
	上級2　22〜24ヶ月
	上級1　19〜21ヶ月
中級	準上級　16〜18ヶ月
	中級2　13〜15ヶ月
	中級1　10〜12ヶ月
初級	準中級　7〜9ヶ月
	初級2　4〜6ヶ月
	初級1　0〜3ヶ月

表—1　この教材の対象レベル

月	火	水	木	金
	文法　オリジナルテキスト（構造シラバス）			
作文	聴解	読解	文化	復習
漢字	漢字	漢字	漢字	自己表現授業

表—2　準中級レベルの週カリキュラム

4—2　授業の進め方

最初の授業の時にオリエンテーションとしてこの授業の目的と注意事項を説明し、終了時には、この授業のコースを通しての感想を聞いてアンケートに答えてもらい終わった。（添付資料2）目的として説明したことは、

1　自分の考えたことや思ったことを他の人に伝えるという話すことの授業

2　使わなくてはいけない文型や語彙はない。自分の持っているもので説明してみる。

3　自分のほしい文型語彙が見つからない時に他の人（教師を含む）に聞いてもよい。

という3点である。注意事項として、

1　全員が話せるようにすること。1人が話し続けないようにする。

2　話したくないと思ったことは話さなくてもよい。できればその理由を説明してみる。
という2点を全体に伝えた。

各授業の始めはその日のテーマを教師が全体と確認しグループ分けしたらそれぞれに始めてもらう。教師は各グループの活動を観察し、1グループ内のコミュニケーションがなんらかの理由で滞っていると思われる時、2メンバー全体に話すチャンスが均等に与えられていないと思われる時、3言語面の援助を要請された時などにグループに近寄り、コメントを出すようにする。また、グループメンバーの構成は1母国語が出てしまうことを防ぐために慣れるまで同じ国の人同士にならないこと　2、学期が変わって新入生が入ってきた時には旧メンバーと新メンバーとが混ざるようにすること　3、休み時間等にはあまり会話がないような関係の人同士を合わせてみる　4、グループでの会話を運営するのが好きな、もしくは得意な人を中心にすること、等に留意して、できるだけ毎回違う人と話すように教師が決定した。

話に夢中になり休み時間を過ぎても話し込んでいるグループがあれば、時間が来たら適当に終えるというグループもあった。しかし、授業の中ではいかに細かく観察しても断片的にしか各グループでの会話を把握することはできないし、全員の学習者に個別のフィードバックを行うこともできない。一つの授業としてやりっぱなしの感があったので、学期途中からグループで話し合ったことを簡単な記述という形で提出してもらうことにした。しかし、時間中に記述しきれないとか、話していたことを文章化しようとした時点で困難を感じてしまうというコメントがあり、この授業の意図とは合わないように感じられてやめてしまった。

4—3　自己表現授業のフィードバック

「表現したいことを見つけ、それを伝えるために言語化する為に文型や語彙を使う」というこの授業の在り方から言えば、表現されたことの言語面の文法的正確さは求めない。しかし、言語教育の一貫としての授業であり、表現してみたことがより文法的に洗練された表現にしたいと学習者が考えたならば、その学習者にとって絶好のチャンスだということもできるだろう。そういう場面は授業の中でも見られる。辞書を調べる等して学習者間で解決できない場合は、同様の理由で教師はその場で言語面での援助をすべきであろうと考える。また、グループで表現してきたことを他の学習者により伝わりやすい形に教師が文法的に修正するという援助をしながら、個々の学習者によって「表現されたこと」をクラス全体で共有するという目的でのフィードバックを各授業の終り方として考えてみたい。

5　結果

アンケート結果を見ると内容が個人的な過去の体験を言うものより現在のテーマについてどのような考えを持っているかについて話すものの方が印象に残ったようだ。直接インタビュー

ではないので本人の真意はわからないが「新しい文法が勉強したいから授業が好きだった」というものがあって、この授業の意義である学習者が必要としているその時に援助を与えられた結果、「知りたいことが得られた」という意味に捕らえることもできる。また、別の機会に記述式のアンケートを行ったが、「個人的なことを話すのはちょっと恥ずかしい」といったコメントがあったが、「同じクラスの友達という気持ちが出てきた」とか「話したことが分かってもらえてうれしかった」等のコメントもあった。

1年間（4学期）に渡って実践を重ねたが、初めの頃にこの自己表現授業を行ったクラスが中級に来た時再度受け持った時におもしろい出来事があった。ある時、テキストの内容から＜憧れの職業＞という話になった。私自身はすっかり忘れていたのだが、初級の頃の＜子供時代＞という表現授業の中で、憧れていた職業について話し合ったことを学習者がはっきり覚えていて、「あなたは獣医だよね」「○○さんはサッカー選手ですよ」とその時のメンバーからのコメントがどんどん出て、新しいメンバーにその時の会話等を説明するという場面があった。たまたまその時の話がそのグループにとって印象的なものだったのかもしれない。しかし、＜憧れの職業＞というキーワードをきっかけに再現されたその時のやりとりを聞いていて、学習者間で心に届くコミュニケーションが実現されたのではないかと大変うれしく感じた。この授業によって相互理解が促進されたかのか、そしてそのことで学習者に心の安定する場が提供できたのか否かの実証は残念ながらできない。しかし、日本語を通して他の人を理解し、理解されるという楽しさや喜びというこの自己表現授業のもたらすものは、少なくともその目的に向かって進んでいる途中だと言うことは間違いないと感じている。

6　今後の課題

これまで「文法や語彙を正しく使えるか使えないか」に気を使い、文型項目を「きちんと積み上がる」ように気を配りながら教えてきたし、それがきちんと行われれば思ったことを思ったように表現できるようになると思ってきた。初級の自己表現授業という課題に取り組むうち、自分の授業、ひいては初級のカリキュラム自体＜自己表現＞ができるような仕組みになっているのだろうかという疑問が湧いてきた。この実践そのものの出発点は学習者が自分自身で居られるような空気があるクラスを作りたいというところから始まったが、このような自己表現授業はコミュニケーションの基盤となるものであり言語学習の重要な一面を担っているという考えから、初級のカリキュラム全体からこの授業をとらえてみることからはじめてみたいと考えている。

7　引用文献 参考文献

『エンカウンターで学級が変わるショートエクササイズ集』(2000)
監修　国分康孝　編集　国分久子　他　図書文化社

『ことばと文化を結ぶ日本語教育』細川英雄　編著　凡人社　(2002)
　　—第三章日本語教師の為の状況論的学習論入門　西口光一
『日本語教育は何をめざすか—言語活動の理論と実践』(2002) 細川英雄　明石書店
『第2言語習得の理論と実践／タペストリーアプローチ』(1997)
　R.C.スカーセラ／R.L オックスフォード
『自己表現中心の入門日本語教育』(1998)
　西口光一「多文化社会と留学生交流」第2号大阪大学留学生センター
『日本語教育のための心理学』海保博之　柏崎秀子　新曜社　(2002)
『こころとこころがふれあう日本語授業の創造』(1998)　縫部義憲　瀝々社